

鹿児島の近現代文学 (2)

直木三十五「五代友厚——大阪物語続篇——」

「鹿児島の近現代」教育研究センター 特任助教 鈴木 優作

直木賞の由来としても知られる直木三十五は、幕末維新の動乱を背景に薩摩藩のお由良騒動を描いた「南国太平記」(1930-31)の人気で一躍流行作家となった。その意味で直木は文学者として鹿児島と浅からぬ縁があるわけだが、今回取り上げたいのは直木が翌年に執筆した、薩摩出身の実業家・五代友厚の伝記「五代友厚——大阪物語続篇——」(1932)である。

「もう、恐らくは、大阪の相当の年配の人でも、五代友厚が、誰であるかを知らぬであろう」という書き出しで始まるように、本作は半ば忘れられた土地の偉人を地元出身の直木が発掘するという体裁をとっており、大阪の産業振興に尽力した五代の知名度が当時は低かったことが窺える。のちに織田作之助『五代友厚』(1942)『大阪の指導者』(1943)をはじめ多くの作家が現代に至るまで五代の伝記を手がけるが、その先駆であったといえよう。

さて今回着目したいのは、本作が五代の伝記であるのと同時に、共産主義やプロレタリア文学が流行した1932年当時の状況を踏まえていることだ。本作は、封建制度滅亡としての明治維新を、プロレタリア(町人)とブルジョアジー(武士)というマルクス主義的な階級対立に比して捉えている。

かくして、封建制度が亡びると共に、こゝに、ブルジョアジー発生の機運が動き、この武士階級より下つた者が、その昔の縁故によつて政府と結び、こゝに旧町人とは別の形式をもつて、後年の政商なるものを、発生せしめたものである。

町人階級は、大きい資本主義となる以前に、武士のこの暴力的制肘を受けて、十分に発達する事ができなかつた。(中略)町人は、この封建人と手をとらなくては、完全に、資本主義の独立が、できなかつた。こゝに、所謂、政商なるものが生じたのであつて、

そして、ブルジョアジーの発生が政商の発祥であり、政商としての五代の成立の起因となったことを分析している。生産力の発展と生産関係の移行に対応関係を見いだす唯物史観である。作中で執筆の意図を「単なる伝記のみでなく、当時のブルジョア発生史として——(中略)その伝記と共に大阪の近代資本主義の発生を書かんが為」としているように、五代を一人物として評価するだけでなく、日本の「ブルジョア発生史」の中に位置づけている。

本作は発表時の現在を振り返る。

世界中は、ます／＼不景気になるだらう。思想はいよいよ危険になるだらう。(中略)経済は、金は資本は、何うなるか？／＼かういふ時代に新しい五代友厚が、出て来なくてはならない。

本作は、1930年に昭和恐慌を迎え経済危機の渦中であつた日本において、幕末・明治という激動の時代に産業界を牽引した五代の業績を振り返り、当時の経済思想と結びつけることによって、時代に奮起を促したテキストといえよう。

令和の時代に生きる私たちは、五代から何を学ぶことができるだろうか。